

開催日：令和7年9月29日（月）
開催場所：自然再生事業実施箇所及び釧路町公民館1階大会議室

釧路湿原自然再生協議会 第2回生態系再生小委員会 議事要旨（現地視察）

■現地視察

（1）ヌマオロ地区 旧川復元箇所について

（委員）

たまりは流れがなく、水質が悪化するのではないかと。

（委員）

周囲からの流入がなく孤立した環境は埋まっていく。また、タンチョウの餌場という観点では魚類の生息が必要である。本川と接続して水質の維持や生物を行き来させることが考えられる。

（委員）

水が滞留していると、いずれ湿性植物が繁茂して埋まっていく。

（委員）

増水時に直線河道側へ水が流れないのか。

（事務局）

旧川復元後は氾濫しやすくなるため、今後の水の動きを注視していく。

（委員）

旧川復元部分でもっと蛇行が発達し、砂州が形成されるようになるとタンチョウが利用しやすくなる。

(2) 雷別地区 森林再生箇所について

(環境省)

今回の視察箇所は防鹿柵では覆われていないのか。

(事務局)

この場所では防鹿柵は設置していない。隣の区画は植栽時期が近いが、ツリーシェルターを外したことで被害が発生している状況である。

(事務局)

10年以上経過している植栽木については、ツリーシェルターを外してネットをかける予定である。

(委員)

ツリーシェルターに黒いメッシュタイプと箱型の2タイプが見られるが、効果などに違いはあるのか。

(事務局)

違いを判断するのは現時点では難しいが、メッシュタイプは風通しが良く、過去に凍結により枯死した例がある場所では、基本的に箱型タイプが良いと考えている。

(委員)

植栽木が折れているということであるが、食害ではなく、角擦りなのか。

(事務局)

食害も見られるが、折られているものは角擦りによるものと考えている。食害による被害が最も多いため、ツリーシェルターを外すのは、まだ様子を見たほうが良いと考えている。

(3) 達古武地区 湿原再生箇所について

(事務局)

ヒシに種子ができる前に刈り取り作業を行っている。また、これまでは刈り取ったヒシをカヌーで引き上げて処分していたが、今年は作業効率を考えてそのまま湖に残置する方法を試行している。

(事務局)

作業区画の水深は0.5～1.5m程度である。最盛期には一面びっしりヒシに覆われていたが、現在はだいぶ少なくなっている。

(委員)

過去に土壌の入れ替えを実施していたと思うが、水質改善などの成果は出ているのか。

(事務局)

土壌の入れ替えにより栄養塩類の流入は一時的に少なくなったと考えられるが、経年での湖の水質としては有意な差はみられなかった。

(委員)

川の水質は調べているのか。

(事務局)

経年的ではないが水質調査は行っており、大きな変化は見られていない。

以 上

開催日：令和7年9月29日（月）
開催場所：自然再生事業実施箇所及び釧路町公民館1階大会議室

釧路湿原自然再生協議会 第2回生態系再生小委員会 議事要旨

■室内会議

(1) 全体構想見直しに係る各取組の点検・評価について

(委員)

事業点検シートの用途を確認したい。

(委員)

事業点検シートはこれまでの小委員会毎の取組成果を評価した上で、今後の課題を記載するもので、今後の全体構想のワーキンググループで議論するための材料となる。

(委員)

現地を見学して感じた印象として、それぞれ大変すばらしい取組であると感じた一方で、釧路湿原を守るためには集水域全体を見て取り組む必要があると再認識した。ヌマオロ地区では、上流農地への影響に関する意見があったが、集水域全体での対策はどうするのか。雷別地区では、今後展開していく上で、自然の遷移あるいは人が少し手を加える程度の手法を考える必要がある。達古武湖では、ヒシだけを駆除しても根本的な解決にはならず、集水域からの栄養塩流入も含めた対策を考える必要がある。全体構想を考えていく上で、集水域全体をどういう姿にしていきたいのか、民有林や農地をどうしていくのかも含めて考えていく必要がある。

(委員)

これまで過去20年間の取組のなかで、ハンノキ林が湿原における緩衝帯の役割を果たしていることが明らかになった。事業点検シートでは、ハンノキ林の動態に注目し、緩衝林としての役割を活用する視点で進めていくべきである。

(委員)

達古武湖のヒシ刈りを一般市民やNPO法人が主体となって実施していくにあたり、ネムロコウホネなどの希少種も刈り取ってしまう懸念がある。事前の勉強会や有識者と協働作業を行うなど、効率よくヒシ刈りを進めていく体制が必要である。

(環境省)

事前のレクチャーの実施のほか、ヒシ以外の水生植物が生育していない時期に実施するなどの方法を考えていきたい。

(委員)

達古武地区森林再生の今後の課題としては、リファレンスとなる天然林のミズナラ林の多様性・保水性の仕組みと比較検討しつつ、カラマツ林の再生事業を点検するということを加えるべきである。

(委員)

雷別地区については、谷地の植生は見事な針広混交林であり、釧路湿原の集水域に展開すべき自然林の典型であることを確認できた。見本となる森林を確認しつつ、植林による再生事業を展開しているという見方ができる。今後、生態系再生小委員会として、この地域の生態系が自然に遷移するステップを見定めて、それを活用した森林再生の手法を考える必要がある。

(委員長)

点検シートの内容については全体構想のワーキングの時にも改めて議論する内容となるため、委員の皆さんは各自内容を確認いただき、ワーキングのなかで改めてご意見を伺いながら進めていきたい。

(委員)

達古武湖は年々浅くなってきているが、塘路湖やシラルトロ湖も近年浅くなっている。今後は達古武湖と同じようにヒシが繁茂していくと考えられる。

(委員)

酪農学園大学でシラルトロ湖の植生調査を実施している。ヒシの分布が南側で非常に拡大している状況であるほか、底泥からメタンが発生していると聞いている。地球温暖化の観点からも、今後、シラルトロ湖を含めた釧路湿原全体をどうしていくのか議論が必要になってくる。

(委員)

達古武湖は集水域における森林の管理状況が悪く、山が削られることで土砂が流入して浅くなっているのではないかと考えている。森林管理を放置した状態で達古武湖の植

生を回復させようとしても水質は変わらない。今までの事業が成功しているのかどうかを総括すべきである。また、森林伐採の状況が流域の中でどうなっているのかを把握したほうが良い。

(事務局)

土砂の流入による湖の浅化は、一定程度は自然な遷移ともとれるため、今後は、不法投棄や開発等による土砂災害の発生など、著しい人為的な影響が発生した場合に協議会として対応を検討していきたい。

(委員)

釧路湿原では人間活動による負の影響についてこれまで様々な研究が行われ、原因が明確であるものについて、自然再生計画を立てて20年間取り組んできた。今後、環境変化の原因が温暖化や森林伐採など、人間活動による影響に関して様々な仮説が新たに出てくると思うが、人間活動が原因である問題に対し、どのように再生するかを検討して決めることが重要である。この点について、次回の全体構想のワーキンググループで厳密に検討することが必要である。

(委員)

釧路市における湿原周辺の太陽光発電も大きな問題だと感じている。

(委員)

太陽光発電に関する議論の場は別にあり、そこで議論すべきである。

(委員)

今後、どこでどういう議論をするのかを明確に周知してほしい。湿原環境が消失したり破壊されている現状を知り、警鐘を鳴らして行動するのが我々の責務だと感じており、この問題から目を背けてはいけないと思っている。

(委員)

小学生と生き物調査をやっているが、近年は水が引かなくなっている。イベント時期をずらしたりして対応しているが、この根本的な原因は茅沼地区の再生事業が影響していると感じている。畑一面が水で浸かり、牧草が泥水だらけになる被害を受けた。

(委員長)

再生事業による影響かどうかはわからないが、地球温暖化により北海道でも線状降水

帯が発生するなど、環境自体が変化している部分もあると感じている。環境の変化についても今後ワーキングの中で全体構想に反映していく部分であるため、改めて意見をいただいたうえで全体構想を考えていきたい。

(2) 釧路川（釧路湿原）植生面積の比較整理

特に質問はなかった。

(3) 雷別地区自然再生事業（森林再生）について

特に質問はなかった。

(4) 達古武地区自然再生事業（森林再生）について

(委員長)

今年度の調査結果も含めて取りまとめたものを早い段階で共有してほしい。

(委員)

カラマツの伐採試験の効果検証について、伐採集材を行うこと以外の負の効果はあるのか。例えば土砂の流出などが森林生態系評価モニタリングで行う昆虫・哺乳類・鳥類等に与える影響についてはこれから検討する予定なのか教えてほしい。

(環境省)

既に伐採を実施済であるため、伐採前の土砂流出状況が不明である。いただいた意見を受けて今後取り組める内容を検討していきたいと考えている。

(委員)

昆虫調査を地元の釧路湖陵高校の生徒とともに行っており、カラマツ林と天然林であるミズナラ林での調査結果を比較している。我々もその成果を見守ると同時にモニタリングしていきたいと考えている。

(委員)

モニタリングの種類にはコウモリ調査も入れて良い。専門家に相談し、どのような種をどのように調査したらよいか計画を立てたほうが良い。

以 上